

ワガママSDGs ガイドブック

プログラムデザインにおける考え方と
学生コーディネートの実践



I'LL ADVISE!



REALIZATION!



TALK TO US!



SDGs

WAGA
MAN

目次

01 はじめに

02 **第1章** ワガママSDGsとは

ワガママSDGsの概要・目的

プログラム概要

コラム ワガママSDGsにおける学習観①



08 **第2章** プログラム設計について

プログラムのポイント

13 **第3章** コーディネーターについて

コーディネーターとは？

コラム ワガママSDGsにおける学習観③



第4章 事例紹介

実践フロー ケース①

実践フロー ケース②

実践フロー ケース③]

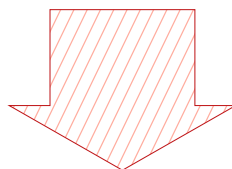
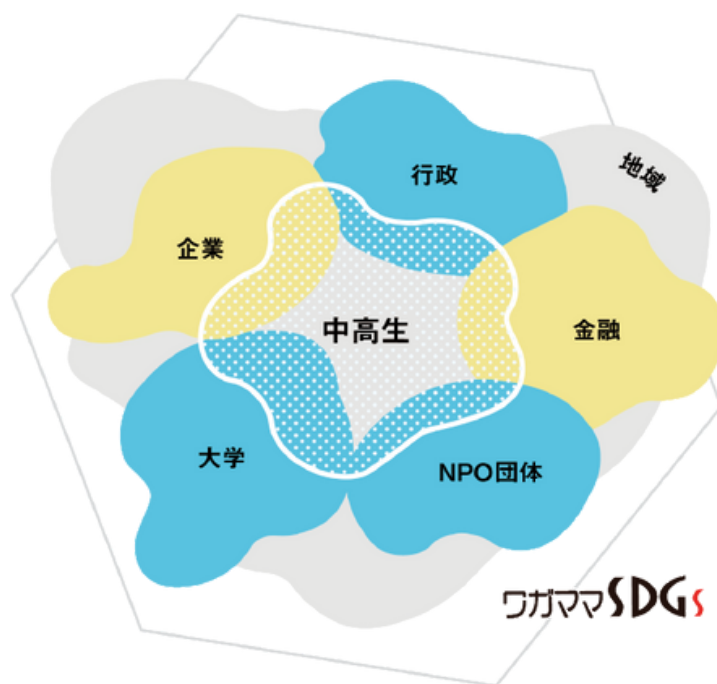
コラム ワガママSDGsにおける学習観③



26 おわりに

はじめに

「ワガママ SDGs」は
中高生が自分の「ワガママ」
から SDGs を考え、
地域の大人と協働で実践する
プロジェクトです。



これからの社会をつくる次世代に、
自分で課題を発見する力と
多くの人たちと協力して課題解決する経験、
そして「**自分が社会を変えられる**」という希望を贈り、
誰もがワガママ言える社会を目指します。

ガイドブックの使い方

このガイドブックは、ワガママSDGsに関心を持った全国の行政、NPO、教育関係者がプログラムを実践しようとする際に参考にすることを想定して作られています。



ワガママSDGsとは

いま、若者は諦めている

6カ国の18歳を対象とした「自身と社会の関わり」に関する調査で、日本は以下の全ての項目で断トツの最下位に。特に「自分は大人だと思う」「自分の行動で、国や社会を変えられると思う」が3割未満と、圧倒的な低さとなっています。

少子超高齢化による人口減少、ビジネスも社会も世界の変化への遅れが指摘される日本。この地の未来を担うべき18歳が絶望しているという事実は、大きな社会課題。

弊社は中高生に「あなたの夢は何ですか?実現をサポートします」とヒアリングしました。返ってきた答え、つまり中高生の“絶望”は、私たちの想像をはるかに超えていたのです。

	自分は大人だと思う	自分は責任ある社会の一員だと思う	自分の行動で、国や社会を変えられると思う	国や社会に役立つ事をしたいと思う	慈善活動のために寄付をしたい	ボランティア活動に参加したい
日本	27.3%	48.4%	26.9%	61.7%	36.2%	49.7%
アメリカ	85.7%	77.1%	58.5%	73.0%	66.7%	70.4%
イギリス	85.9%	79.9%	50.6%	71.2%	69.5%	64.2%
中国	71.0%	77.1%	70.9%	82.1%	78.9%	85.3%
韓国	46.7%	65.7%	61.5%	75.2%	62.4%	70.7%
インド	83.7%	82.8%	78.9%	92.6%	83.7%	78.1%

※日本財団「18歳意識調査」2022年3月

中高生に、社会を変革する力を。

絶望した18歳になる前に。「やってみよう」と思った中高生に、自ら課題を発見する力と、解決する事業構築の基礎力を。そして実際に「様々な人と、力を合わせてやってみよう」経験をする、ソーシャル・アントレプレナーシップの実践学習プログラムを開発しました。

これからの社会をつくる次世代に、自分で課題を発見する力と多くの人たちと協力して課題解決する経験、そして「自分が社会を変えられる」という希望を贈り、誰もがワガママを言える社会を目指します。

ソーシャル・アントレプレナーシップ教育に重要な3つの要素

自分自身で課題を見出すこと

これまでなかった方法で取り組んでみる

多様なステークホルダーと協働すること

ワガママSDGsとは

若者に、諦めず、「理想（ビジョン）」を描いてもらう。そこから地域社会の皆様と共に社会課題を発見し、解決の第一歩を実行してみる。若者の、意欲・自制心・やり抜く力・社会性を育成する社会教育プログラム。それが、ワガママSDGsです。

中高生を対象に、「自分事社会課題を発見する力」と「事業構築のための基礎力」講座を実施。実際に、地域の産官学民と協働でプロトタイピングまで行います。



プログラムのプロセスと特徴

自己課題の 発見

「自分事」だから、「主体性」が育まれる。

「既存の枠組みを超え、新たな価値をつくる」が求められるアントレプレナーシップでは、主体性が非常に重要。しかし一般的な中高生向け教育では、テーマが既に設定されているなど「やらされる」他律的な構造が多くみられます。ワガママ SDGs では、「自らテーマを見つけ出し、解決に取り組み続ける」原点となる自分軸を発見する機会を作ります。

社会と協働

社会の一員になるから、社会を信じられる。

社会の複雑化が進み、課題解決には、SDGs17で謳う「パートナーシップ」による協働が欠かせません。学生同士でなく、1プレイヤーとして産学官民金の多様なステークホルダーと協働する機会が、実践的な課題解決力を育みます。

実践学習

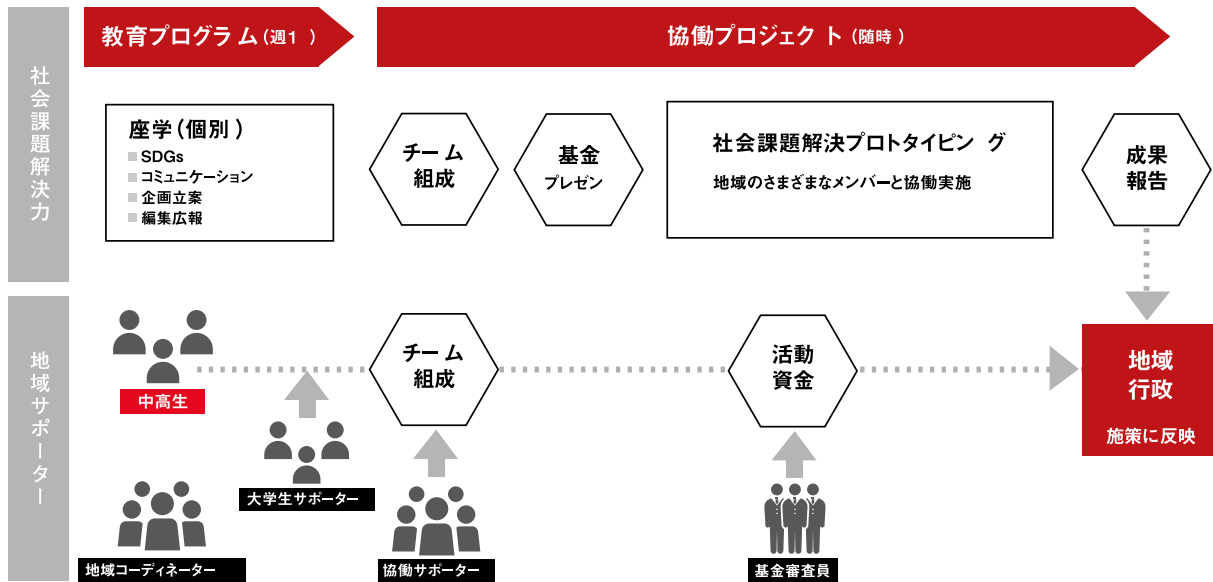
失敗するから、生涯を支える学びになる。

「ビジネスプラン作成」と「表彰」で終わるプログラムが一般的だが、多くの起業家はその先、実際に「やってみる」試行錯誤のなかでビジネスモデルを修正するアジャイル手法が有効と考える。「失敗できない」学校教育に対し、「失敗できる」学びの場としても大きな役割を果たします。

プログラム内容

前半は企画、編集、ITなどのプロフェッショナルによるワークショップスタイルの講座で企画立案や協働の基本を学びます。その後、学生それぞれの自分事から見つけた社会課題をもとに、地域の企業や行政などの社会人とチームを組成。基金を用いて課題解決のためのプロトタイピング（試作）を行います。最後はベンチャーキャピタルの前で成果発表を実施します。

※実施期間は実施地域や運営団体によってカスタマイズが可能です



運営体制



参加した中高生の声

2021年度、プログラムに参加した学生たちの声です。

学校では教わることのできないことを学び、経験できた。また、自分のコミュニティの狭さを感じ、世の中にはもっと色々な人がいることを身をもって学べた。

人がつながる場所をつくったけど、ぼく自身が人や地域とつながれたのかもしれない。

「海外の貧困を救いたい」。その一つの視点だけにとらわれていた自分を見つけた。

同じ「あればいいな」をもった子たちが出会ったり集ったり
それがいるんな場所でおこなわれたら、十分に持続可能になって。

たくさんワガママを言えて、ワガママを叶えることの難しさ、企画の難しさ、諸々たくさんのことを学べた。仲間とかけがえのない最高の時間が体験できた。

この活動に参加出来なかったら得られなかった貴重な経験ばかりで、自分自身も驚くぐらい成長できた。

SDGsって勉強することじゃなくて、実際に行動することだなんて。

何かしたいって想いを大人の方々や友だちが尊重してくれ、ほんとにただワガママ言える空間だった。

わたしの「どこでも充電したい」が「災害現場で役に立つかも」と、「人のため」につながる可能性が出てきたとき、すごいと思った。

物事は、誰かが熱く語るワガママから始まるんだろうなと改めて感じた。

自分がやりたい！と思ったことを最後まですることができたし、たくさんの人にサポートしていただけた。



今まで「ワガママ」は自分勝手なもの、我慢しなきゃいけないものというマイナスなイメージを持っていました。

けれどこのプログラムで自分のワガママを叶えることで周りも幸せにできるかもしれないと知り、実際に私のワガママと同じような思いを抱いている人が多くいることにも気付きました。

自分のワガママが実行する原点なので、やらなければならないことは沢山あっても全く苦ではなくいつも楽しく活動でき、「サービスを作る側も楽しいし受け取る側にも利益がある」そんな素晴らしいものなんだと気づきました。

これからも今回のプログラムで学んだ沢山のことを活かして、楽しくワガママに生きていきたいと思います。

活動終了後、一人ひとりの気付きや学び、成果を、市長・自治体への表敬訪問で共有。施策への反映も進められています。

コラム / ワガママSDGsにおける学習観 01

エンパワメント

エンパワメントとは、ブラジルの教育思想家であるパウロ・フレイレが提唱した言葉です。彼が取り組んだ教育実践では、学習者が文脈から切り離された知識を身に付けるのではなく、自分が置かれている状況に気づき（メタ認知）、それを変革していくことを通じた学びのプロセスが描かれました。

エンパワメントとは、ブラジルの教育思想家であるパウロ・フレイレが提唱した言葉です。彼 ワガママSDGsにおいても、参加する中高生はまず自分の違和感に着目し、違和感を生む原因を探る中で、自分と社会の関係性をメタ的に捉えていく機会を得ます。その後、企画やプロトタイピングを通して、他の参加者や協働コーディネーター、協働メンバーなど、背景の異なる人々との対話を繰り返したり、自身の実践への他者からのフィードバックを受けたりして、自分と社会の関係性を再構築していきます。

結果として、自分自身が社会に働きかけられる存在であることを自認し、新たなアクションに取り組む様子も見られます。ワガママSDGsのプロセス全体を通して、参加する中高生はエンパワメントされている、と言えるかもしれません。



プログラム設計について

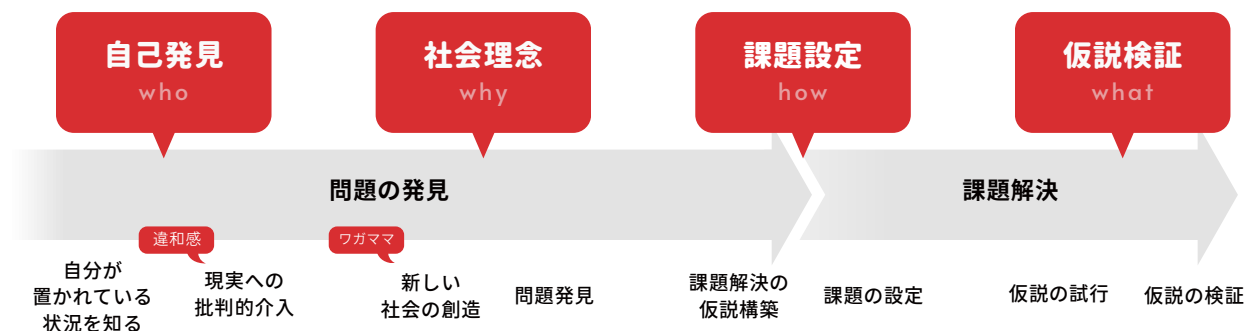
ワガママSDGsで重要なポイント

対象	中高生
参加費	無料
導入	(お題に対する課題解決ではなく) 問題発見への比重が高い
内容	予算を持って社会をフィールドとして「実践」する期間があること
体制	中高生によるチーム制で取り組むこと (同世代との関わり)
体制	各チームにコーディネーターと企業・行政サポーターが1名以上ずついること (社会人との関わり)

カスタマイズできること これらは実施主体・参加者・規模によってカスタマイズ可能です。

エリア	期間	オンライン/オフライン	参加者数・ チーム内人数
実践時の予算	協働メンバーの 属性・有無	ワークショップの 有無	ワークショップ 外部講師の有無

自分事から始まり、社会変革を起こす力を育む、リベルタ式・学習プロセスモデル



実践も、学習も、手厚く！

公募で集まった24名の中高生を対象に実施。神戸を中心に関東や東海、中国地方、海外からの参加もありました。オンラインを中心に教育プログラムやチームミーティングを行うことに加え、対面での交流会や合宿、地域での実践まで8ヶ月かけて伴走しました。予算には助成金を使い柔軟な設計と運営が可能だったため、多くのリソースを活用することができました。

基本情報

エリア	：神戸（対面・オンライン）	体制	：コーディネーター5名 / 企業・行政サポーター10名 / プロデューサー2名
期間	：8ヶ月（5月～12月）※延長あり	ワークショップ	
対象	：中学1年生～高校3年生	外部講師による以下事前ワークショップあり	
人数	：24名（5チーム）	・コミュニケーションデザイン	・これからの社会の常識（エンパワメント）
		・編集の教室	・企画

実施スケジュール

3月まで ●体制の構築

主に、コーディネーターのリクルートを実施。20名の参加者を想定し5名のコーディネーターを配置しました。コーディネーターの選定基準は、神戸で自分の関心分野に基づいた地域プロジェクトを企画立案～運営した経験があり、それを元にしたローカルネットワークを持っていること、また中高生や大学生等若い世代の育成に関心があることなどです。

●プログラム設計

ワガママSDGsにおいて最も重要なのは、参加する中高生が自分たちの興味関心に基づいて地域で実践することです。実践のためには何が必要かを逆算し、主体性を高めるワークショップや企画について学ぶグループワーク、チームワークを深める交流会などのプログラムを設計しました。

4月 ●参加者募集開始

ボランティア募集サイトやSNS等、インターネットを活用した募集がメインでしたが、繋がりのある学校の先生や教育委員会にも情報発信を依頼したり、対象となる地域の行政から後援を受けるなど幅広く広報の戦略を打ちました。

●説明会開催

関心はあるけれど、もっと中身をよく知りたいという中高生に向けて、オンラインで説明会を開きました。ワガママSDGsのエッセンスである「主役は中高生であること」や「一緒に作り上げていく」雰囲気伝えるために、インタラクティブな場を作りました。

5月 ●オンライン講座：これからの社会

いよいよプログラム開始。まずは人生100年時代、VUUCAの時代と言われる社会背景についてレクチャーすることで中高生が自分たち自身が置かれている世界をメタ的に捉えるきっかけを作り、主体性を引き出すことを狙いました。

●オンライン講座：コミュニケーションデザイン

ワガママSDGsで企画実践していく中で、大事にしていることの一つに「協働」があります。良い協働を生むための土台として質の高い関係性を作るため、どう仲間とコミュニケーションを取っていくかという観点からワークショップを行いました。

6月 ●オンライン講座：編集

編集の講座では、中高生が日頃感じている違和感をテーマに文章を作成しました。この講座の狙いは、中高生が自分自身との対話を深めることです。自分は何に違和感を持ち、それはなぜ生まれるのか。しっかり自分と対話し深掘りする機会と方法を提供することで、プロジェクトの企画や実践の根っこになる部分を探りました。

● オンライン講座：企画

企画の講座では、ローンチシートを元に企画の骨子を作っていました。ワガママSDGsにおける企画として重要視しているのは考える順番です。一般的に言われている社会課題やSDGsのカテゴリーのようなテーマから考える（社会課題を自分ごと化する）のではなく、あくまで中高生自身が感じる違和感や身の回りで変えたいことから出発し、それが変わることによって喜ぶのは誰なのか、という順番で考えていきます（自分ごとの社会化）。そうすることで中高生が「自分がなぜそれに取り組むのか」という点が腹落ちした状態で実践に取り組むことができます。

7月

● リアル交流会

中高生同士、中高生と協働コーディネーターの関係性を深めることを狙い、対面での交流会を開催。コミュニケーションデザイン講座を担当した講師に再登壇いただき、身体を使って楽しむワークショップを実施しました。

● チーム結成

リアル交流会でお互いの雰囲気や共通点がより明確になったタイミングで、今後の企画を実施していくチームを作りました。これまでの編集や企画の講座を通して見えてきた自分達のやりたいことをお互いにシェアしながら、一緒に実践していけるようなメンバーを募りました。結果として5チームが結成され、それぞれのチームに1名コーディネーターが割り振られました。

8月

● 合宿・企画仮案発表

チーム結成後は、仮の企画案を作っていくことを目標にチームごとに議論を進めていきました。合宿では審査員を相手に仮の企画案を発表し、不足している視点や類似する事例に関する情報提供、大事にすべきユニークな視点などについてフィードバックを受け、企画のブラッシュアップの糧としました。

9月

● 企画・調査

合宿で得たフィードバックを元に企画をブラッシュアップしていくとともに、類似事例の調査や同じような課題に取り組んでいる街の先輩（NPOや行政の職員など）にヒアリングを行い、より多角的な視点から設定したテーマを考える機会を作りました。ヒアリング先は中高生自身が調査しアポを取ったり、コーディネーターのネットワークで繋いだりしました。

10月

● 試行錯誤と中間報告

まずは小さくトライしてみる、を念頭にできるだけ早い段階で実践することを目標としていましたが、実際はまだヒアリングの調査が続けられていたり、企画が固まりきらなかったりするなど、試行錯誤が続くチームが多かった時期です。また、9月-11月は中間報告として全員がオンラインで集まり、審査員に進捗状況や困りごとなどを共有しフィードバックを得る機会を月に一回設けました。

11月

● とにかく実践

最終成果報告会の日程は事前に決まっていたため、逆算するとこの時期には実践することが求められました。人を集めたイベントを開催したり、SNS上でキャンペーンを展開したり、思い思いの企画をプロトタイプとして実践しました。

12月

● 最終成果報告会

全チームの中高生、コーディネーター、企業・行政サポーター、そしてこれまでプロセスを追いかけてくれた審査員の皆さんが一同に介し、これまでやってきたプロセスとそこから得た学びを発表しました。発表会の様子はオンラインで限定的に配信し、企画に関わった地域の人々や保護者の皆さんにも見ていただける機会を作りました。発表会の後は、ワガママSDGsの経験を踏まえてこれから取り組みたいことを考えるワークショップや交流会も開催。これからもワガママSDGsコミュニティとして緩く繋がっていきこうという認識を再確認しました。

1月～
2月

● 実践延長

最終成果報告会後も引き続き実践したいというチームもありました。進め方は完全に各チームに任せられ、各チームの協働コーディネーターと協働メンバーが引き続き伴走しました。

3月

● 市長提言

神戸市と連絡調整し、中高生がワガママSDGsで取り組んだことを元に市長に政策提言する機会を作ることができました。用意した政策提言フォーマットに沿って、それぞれのチームが実践してみた今だからこそ、改めて市長に伝えたいことやお願いしたいことをまとめプレゼンテーションを行いました。

結果（組成されたプロジェクト）

💡 LGBTQ への理解を深めて違いを認め合える社会を作りたい！

**Allyポーズを作って
フォトコンテストを実施**

💡 学校の制服や校則について考え直す楽しい場を作りたい！

**自分たちが着たいと思える制服を着た
オリジナル文化祭を開催**



💡 生徒が主体的に学ぶことができる教育環境を生み出したい！

**生徒が主役になる授業を考案し、
子どもたちを対象に実践**

💡 障がいを持つ人と中高生がつながる社会をつくりたい！

**障がいを持つ人が作った商品を集めた
ポップアップストアを実施**

💡 家庭環境に悩む中高生をなんとかしたい！

**不登校の中高生も楽しく参加できる
街歩きイベントを実施**



パートナー団体が実施主体！コンパクトに、実践・学習！

京都で活動する支援団体（認定NPO法人グローバル人材開発センター）が実施主体となり開催。インプット部分はコンパクトに、実践にできるだけ時間を費やしました。公募で集まった7名の中高生が参加し、5つのプロジェクトが生まれました。

基本情報

エリア	：京都（オフライン）	体制	：コーディネーター1名 / 企業・行政サポーター3名 / プロデューサー2名（リベルタ学舎からのサポート1名）
期間	：7ヶ月（8月～2月）	ワークショップ	外部講師による事前研修あり
対象	：中学3年生～高校2年生（公募）		
人数	：7名（5チーム）		






実施スケジュール

前提

本ケースはワガママSDGsの多地域展開を目的に実施しました。そのためリベルタ学舎が運営を行うのではなく、理念や事業内容が近い団体と連携し、その団体がワガママSDGsを開催するパートナーシップ型の運営方法を取っています。

4月	ワガママSDGsの説明・京都での運営方法の協議	9月	実践に向けたチーム編成
5月	ワガママSDGs京都の運営体制の設計・協議	10月	実践
6月	プログラム設計	11月	実践
7月	参加者募集開始	12月	実践
8月	4日間連続での座学&企画立案ワークショップ	1月	実践
		2月	最終成果報告会

結果（組成されたプロジェクト）

-  学校で自分らしく過ごすための校則や生徒主体の学校づくり
-  自分の好きな表現を過度な規制から守る啓発動画の制作
-  都農町の魅力を広めるための都農ワインを使ったサウナ用アロマの提案
-  気候変動問題への対策としての海藻養殖の提案
-  自分の意見を伝えるの苦手な人の成功体験を作る対話イベントの企画運営

留意点

パートナーシップ型のような運営を行う場合、以下の点に留意する必要があります。

- ワガママSDGsの理念に基づいた「実践」の定義とその具体的な目標の明確化（目標の具体化）
- 目標を達成する上で重要な役割を担うコーディネーターの適正な配置（運営体制の具体化）
- コーディネーターが担う3つの役割（3章参考）と具体的な行動の摺り合わせ（方法の具体化）

実践に特化！

民間企業（NEC）とリベルタ学舎が共同で大阪府内の公立高校の探究的な学習の時間にワガママSDGsのプログラムを一部導入しました。10月に問題発見のワークショップでキックオフした後、翌年2月にかけてプロジェクト設計、実践までを伴走。コーディネーター／企業・行政サポーターとして民間企業のプロボノの方々が参画し、中高生の企画をサポートしました。

基本情報

エリア : 大阪（オフライン）	体制 : コーディネーター4名 / 企業・行政サポーター12名 / プロデューサー2名
期間 : 4ヶ月（11月～2月）	ワークショップ
対象 : 高校2年生	外部講師（リベルタ学舎）による事前研修あり
人数 : 16名（4チーム）	

実施スケジュール

前提

実施校では課題研究の授業として、1年生から生徒の興味関心に沿って調べ物学習を進めています。

今回対象となったのは「地域活性化」というテーマに関心のある2年生16名。学期の途中からではありましたが、学校内では実現が難しい「生徒が地域に出て実践するところまで」を伴走支援しました。

- ワガママを実現するための企画講座
- 企画作戦会議ワークショップ
- 企業・行政サポーターとのチーム結成
- ワガママ実現プロトタイプینگ
- 成果発表プレゼンテーション

結果（組成されたプロジェクト）

- 💡 地元の商店街を活性化したい！「商店街イベントに参加し、中高生目線でWeb記事を作成」
- 💡 シェアサイクルをもっと使いやすく！「市が管理するシェアサイクルについて調査し、市に政策提言」
- 💡 観光地のポイ捨て問題を解決したい！「自分たちが行きたくなくなるゴミ拾いイベントを企画・提案」
- 💡 フードロス問題を解決したい！「高校近くのパン屋さんにロス食品の活用方法を提案」

留意点

学校のプログラムとして導入する場合、下記の点について特に調整が必要となります。

- 管理職である校長先生・教頭先生はもちろん、授業を担当する現場の先生方など校内のキーパーソンとの期待値の調整や役割分担の明確化を行う。
- 参加する中高生が使える授業のコマ数はどの程度あるか。テスト期間や学校行事などを含めて見通しを立てる。
- 参加する中高生が授業時間外の時間をどの程度使いたいと思っているか、もしくはほとんど使えない状況なのかを事前に把握する。

コーディネーターとは

ワガママSDGsでは、中高生によるチーム活動の目標達成をサポートしながら、参加者一人ひとりの学びを最大化するために、コーディネーターによる伴走支援を行います。実践期間中チーム活動の円滑な進行や、チーム内の協力関係の促進という一般的なコーディネーションに加え、対話を通じて、一人ひとりの学びを引き出す存在です。

コーディネーターは、大小問わず自分の関心分野に基づいたローカルプロジェクトを企画立案～運営した経験から、地域の状況や団体の取組・人といったローカルネットワークを持ち、必要に応じて様々な外部実践者を中高生に繋ぐことができる人が望ましいです。

「大人と子供」という関係性を超え、チームの一員として中高生と同じ目標に取り組むことで、中高生に「自分のワガママが社会課題解決へ繋がる」という気付きを促し、「それを応援してくれる人が地域に数多く存在する」環境・文化づくりを目指します。



中高生に関わる上でのポイント

中高生一人ひとりの課題意識に基づいて、チームで、期間内に実践するプログラムであるワガママSDGsでは、



内的な気付きを促す
問いかけ



チーム内の連携を深める
コミュニケーション



外的な学びを促す
コーディネーション

を意識して、伴走支援に取り組むことが重要です。

内的な気づきを促す問いかけ

教育プログラムにおいて重要なことは、成果物ではなく、そのプロセスの中での参加者の学び・気づきを最大化すること。インプットの比重が大きい学校教育と異なり、ワガママSDGsでは実践の中で、内的な学び・気づきを促すことが重要です。

肯定による、自信の醸成

普段 家庭・学校以外でなかなか大人と接することのない中高生にとって、大人と対等な意見交換ができることは貴重な体験。「それ、いいね」「なるほどね」「おもしろそう!」と、中高生の話を否定せずとにかく肯定する、尊重することが大切です。どんな意見・考えも受け入れてもらえる安心感が、中高生の主体性を促します。

的確なフィードバック

まだまだ考え切れていないように感じるアイデア・アクションであっても、初めから全てを否定するのではなく、良い点・改善すべき点を切り分けてフィードバックすることが重要です。プロジェクトの目的・実現可能性・期限を意識しながら、アイデアを拡散させるタイミングと収束させるタイミングを考えてコミュニケーションを取っていきましょう。

参加者の「自分の言葉」を引き出す、「なぜ」

ワガママSDGsでは、通常のアシレーションに加え、「参加者一人ひとりの心の中を深く省みる内省」を重要視しています。「なぜそう思うのか」と一歩踏み込んだ問いは、一人ひとりの「当たり前」を見つめ直すきっかけを与え、「自分と社会の関係性」への気づきを促します。



チーム内の連携を深めるコミュニケーション

ワガママSDGsのチーム活動は、中高生同士はもちろん、コーディネーターや協力企業・個人など多様なステークホルダーと共に進んでいきます。一人ひとりが遠慮せずに発言し、チームとして期限までにアウトプットを行うために、立場や状況・タイミングに合わせてコミュニケーションを行います。

チーム内での、潤滑油

性格はもちろん、出身や在学・学年など、バックグラウンドが異なる中高生。チームとして一丸となってひとつのゴールに向かえるよう、参加者同士の共通点を見つけながら、一人ひとりが役割を得るようにコミュニケーションを促すことが重要です。加えて、個々人の価値観をぶつけ合うのではなく、「ゴールに対してどう取り組むべきか」という視点で建設的な議論ができるよう、チームのビジョン・方向性を決めることも大切です。コーディネーターが一方向的に決定するのではなく、中高生の意見を引き出しながら、チーム内メンバーが納得できるビジョンを探しましょう。

社会と中高生の、翻訳者

普段から大人との対等な意見交換の機会が少ない中高生にとって、初対面の大人へのコミュニケーションの取り方は知らないことばかり。メールの書き方などの「お作法」は教えながらも、明確で簡潔な言葉を使い、相手が理解できるように伝えることの重要性に気付けるよう、サポートしましょう。



外的な学びを促すコーディネーション

ワガママSDGsの協働コーディネーターは、中高生同士が互いに対等な関係を築き、チームの活動を円滑に進める一般的なコーディネーションに加え、「中高生と社会をつなぐ」ことで参加者に新たな気づきを与える役割があります。ヒアリング先として社会課題の当事者や実践者と中高生を繋ぐことはもちろん、新たな視点・知識、気づきや考えなど、中高生の視野を広げるヒト・モノ・コトは非常に多く存在します。

時間をかけて、内的に繋げる

「それまで気づかなかったものに気づく」「見えていなかったものが見える」「わからなかったことが分かる」という体験は、単に知識としての情報を得るということとは異なり、まさに自分自身が生きている世界が広がっていく体験となります。そのように、単なる情報から体験に昇華させるには、一方的に・短時間で伝えるのではなく、問いを通じて時には「待つ」ことを大切にされたアプローチが重要となります。チームの状況や、一人ひとりの理解度・スキルを鑑みて、できる限り内的に繋げることを意識しましょう。

前提として重要な、本人理解

前述の通り、ワガママSDGsの参加中高生は、年齢やスキル・考え方が一人ひとり異なります。内的な気づきに繋がる適切な問い・コミュニケーションは、チームの状況に加えて、一人ひとりの理解度・スキルを鑑みることが重要になるため、日頃のコミュニケーションから性格や考え方の傾向などを観察するように心がけましょう。

コラム / ワガママSDGsにおける学習観 02

変容的学習

学校の授業という場は生徒が先生から知識を教えられ、どのくらい知識が定着したのかをテストで測るいわゆる工場型の教育が中心になっています。一方、アメリカの教育学者であるメジローは、準拠枠（ものの見方や行為の習慣的な枠組み）を変容させていくことこそ学習であると主張しました。

ワガママSDGsでは、参加する中高生が学校の中では出会うことのない学校外の中高生や社会人で構成される実践共同体へ参加し、なかなか取り組めない企画や実践にチャレンジしていきます。そのプロセスの中でこれまでのものの見方や考え方が変容していき、新たな準拠枠が構成されていきます。プログラムが終了した後も、この準拠枠を変容させ、再創造していく学びのプロセスを自ら作り出せる「主体的な学習者」が多く生まれることを期待しています。



プログラムの様子

プロジェクトの変遷とコーディネーターの関わり

本章では、2つの具体的なプロジェクトをピックアップし、それぞれのプロセスを記述します。プロジェクトにコーディネーターや審査員などからのフィードバックがどのように影響したのかを見ていきます。

チーム名	スタートとなったワガママ	チームビジョン
Shining Rainbow	好きなものを好きっていい たい!	LGBTQへの理解を深めて 違いを認め会える社会を 作りたい!

LGBTQへの理解を深めたい! とスタート。当事者へのインタビューや、同世代約140名へのアンケートを実施。想像以上にLGBTQの認知度が高いことが判明。

「アライ」(LGBTQの支援者)を増やすアプローチに方向転換。

ドラマ・広告・ウェブサイトを通して発信することと、さらに当事者とアライの連帯を示す商品を販売することその2軸をプロジェクトの柱とすることに。

合宿にて審査員からのフィードバック

目標が不明確。認知をどう広げて、それをどう興味・関心につなげるの?

今の自分たちにできることを模索し、ポーズを作って広める案に。インスタ投稿を実施中。

ALLYポーズを広めるために、フォトコンテストの開催を決定! 期間は11月7日~11月21日。

でも…コンテストの景品は、QUOカード? もしかしたら、お金じゃない方が良いのかも?

審査員からのフィードバック

お金目当てのひとは、ターゲットではないのでは」
すごくすごく素敵で大切な着目点!

Instagramの広告はクリック単価が一桁台と、かなり順調。でも、なかなか写真が投稿されない…。もしかしたら、中高生は鍵アカウントで写真をアップロードできない!?
周りの人たちに声かけをして Allyポーズの写真を集めて、Shining Rainbowアカウントで掲載を開始。

徐々に写真は増えているけど、期間を延長してもっとたくさんの人にコンテストを知ってもらいたい。

審査員からのフィードバック

ALLYに関心を持っている人たちは どこにいるか、
そこにアプローチ してみることも一案では?

チーム名
Chanced

スタートとなったワガママ
困っている人を助けたい!

チームビジョン
**障害を持つ人と中高生が
つなげる社会を作りたい!!**

5つの支援団体へアンケートを実施。判明した課題は「広報と資金」。「お金もノウハウもない学生の私たちが何ができるんだろう」と模索。

コーディネーターからの一言

「そういった団体さんが、今まで高校生に働きかけができてなかった部分を考えてみたら?」

11月に開催の「SDGs AICHI EXPO」というイベントにポップアップショップとして参加予定。マルシェ参加の準備に奮闘中。たくさんの事業者とやり取り、仕入れ商品の調整 掛け率の確認 必要備品やロゴマークの発注など、作業と確認、データ管理が膨大!

無事にマルシェ開催! 当日は大盛況!!! さらに、マルシェの運営者から次はこれに出展しないか? というお誘いが…!?

もう一度、マルシェをやりたい!

審査員からの一言

成果発表会で、次のマルシェプランをぜひ発表してください。

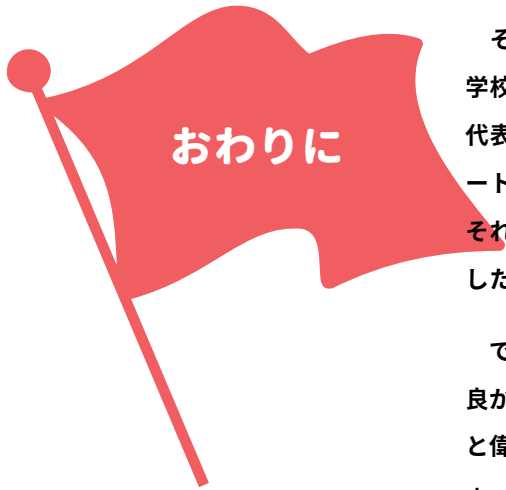
コラム / ワガママSDGsにおける学習観 ③

| コンヴィヴィアルな学び合い (イリイチ)

1971年に出版された「脱学校の社会」の中で、著者であるイヴァン・イリイチは「教えられること」と「学ぶこと」が混同されていることに問題提起をしています。学びが制度化された現代では「子どもは学校で学ぶもの」という前提の元、教えられるべきもの(知識)は教える側が設定し、子ども達はそれを受動的に流し込まれる、という構図を取ります。果たして主体的な学びとはそのような構図の中で生まれるものなのでしょうか。

ワガママSDGsでは、コーディネーターは「教える側」という立場を取らず、「共に学ぶ者」として中高生に伴走します。ワガママSDGsに関わる中高生、コーディネーター、その他企業メンバー、行政メンバーなどがフラットに関わり、それぞれが学び合う立場を取るのです。つまり、固定化された「学ぶべきもの」を吸収するという世界観ではなく、「やりたいこと」に協働で取り組む過程に関わる人達の間相互共働的(コンヴィヴィアル)に学びが生まれるという世界観に立ってプログラムを設計しています。





そもそも最初、中高生の夢を叶えようとしたら、「夢なんてないよ！だって学校でも家でも毎日、“夢みたいなこと言うな”って言われるんだよ」と（大人代表として）怒られたので、「じゃ、ワガママ言うことから始めよう」とスタートしたのだった。いわゆる“ソーシャル”とはかけ離れたタイトルに、それはそれは多くの社会人から眉をひそめられたものだ。「ちゃんと、社会課題解決したら！？」って。

でもいまでは、伴走する私たちにとっても、「ワガママ」という名前で本当に良かったと思っている。もし学生の夢を叶えようとしていたら、私たちはちょっと偉そうな気分になり、学生を支援する自分に至極ご満悦で、そしてある日「ちょっと本業が忙しくなって」とかなんとか、この場を去っていただろう。

だけどこのプロジェクトには、私たちそれぞれの「ワガママ」も織り込まれている。学生に伴走したい、こういう未来共創が好きな社会人や企業に出会いたい、地域コミュニティをつくりたい！それが「ソーシャル・グッド」だからやるのではなく、「自分のワガママです！」と断言できる強さを手に入れた。

誰からも頼まれていないのにやってしまう。そんなクレイジーな熱しか、周囲を動かさないし、何かが変わるまで続かないと思う。出発点が、関わるひと全員ワガママ。だからこそ、SDGsという夢の実現を力強くたぐり寄せることができる。

You may say I'm a dreamer, but I'm not the only one. I hope いつか一緒にワガママやろう！

一般社団法人リベルタ学舎 代表 湯川カナ

ワガママSDGsは、予算や規模・期間に合わせてアレンジすることが可能な教育プログラムです。導入の仕方や、中高生との関わり方など、気になる点がございましたら、お気軽に当団体までご連絡ください。



発行者情報

ワガママSDGs ガイドブック

2023年3月31日発行

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

発行所	一般社団法人リベルタ学舎
発行人	湯川カナ
編集	大福聡平、山下和希、唐津周平
デザイン	森崎真琴